



6月25日 祥月命日合同法要「高田慈昭師」

しんらん同人

No.539
7・8
月号

浄土真宗本願寺派 誓願寺

〒171-0052 東京都豊島区南長崎1-3-8

【電話】03-3950-7828 【ホームページ】<http://www.seiganji-tokyo.jp/>

われもひかりのうちにあり

誓願寺住職 古賀尚之

七月・八月にはご家庭やお寺でお盆法要が行われます。

お盆は「盂蘭盆会」とも呼ばれ、「盂蘭盆經」にその記述があります。

お釈迦様の十大弟子の一人である目連尊者が、餓鬼道に落ち苦しみを受けている母親を救おうとして、お釈迦様の教えに従つて法要を行い、仏・法・僧の三宝に供養したことに基づくと言われています。

また「盂蘭盆」という言葉自体に「死者の靈魂」という意味がありますので、日本では仏教伝来とともに先祖供養の法会として取り入れられました。

一方浄土真宗では「お盆にご先祖が祖靈としてかえつて来られる」という考え方なく、親鸞聖人が「讚阿弥陀仏偈和讚」に「安樂淨土にいたるひと、五濁惡世にかへりては、釈迦牟尼仏のごとくにて、利益衆生はきはもなし」とたたえられたように、い。

浄土に往生して仏になられた亡き人が、還相の菩薩として再びこの世に還つてきて、お釈迦様と同じように衆生を救う働きをし続けていらっしゃると受け止めていきます。

したがつてそれはたらきは、お盆という期間が限定されたものではありません。また血縁関係のご先祖に限らず、亡き人すべてを含みます。

しかし、私達はいつもご先祖や亡き人からのおはたらきを思い続けているかといえば、そうではありません。むしろ忘れた日々を送っているのが現状です。

お盆は、普段ご先祖や亡き人のはたらきを忘れがちな私達がそれを思い出すための一つの節目として考えることが出来ます。(参考 本願寺出版冊子)

誓願寺でも後述の日程で法要を行います。

ご家族の皆様お誘いあわせの上お参りください。

仏道の原点

誓願寺住職 古賀尚之

二月に思わぬことから初期腎臓ガンの手術を受けて以来
「死・いのち」という言葉に敏感になったようです。

そうした中で先日、佛教伝道協会発行の
「新々みちしるべ。菩薩シリーズ・慈悲」
という書物に出会いました。

ここに内容の一部を掲載いたします。
なお私の責任において省略や加筆を致しておりますので
その点ご容赦下さい。

「執着を離れ 無常をさとろう」

この言葉は「無量寿經」に説かれている教言で、この世界、
この人生はすべて無常であつて、変転きわまりないことを、深く
思い知つて生きよ、ということを教えたものです。

この無常ということは、私たちの人生にとつては、何よりも死
という事実において明瞭であり、死という問題はもつとも根源的
な問題であつて、浄土真宗では「後生の一大事」ということを
語ります。死んで行く先、後生こそが一番のおおごとだというこ
とです。

この私はやがて死ななければならぬが、覚悟はよろしいかと
いう問い、仏道の原点はここにあるといえます。

死という問題は、東洋でも西洋でも古くから問題にされていま
す。ギリシャ時代の哲学者が言つたように、私たちは生きている
かぎりは死ぬことはありません。それは当たり前のことです。そ
して死んでしまつたら、死んだと自覚する私はいなくなります。
かくして、トータルでは、人間には死は存在しないということに
なります。

死の問題を客観的に捉え、死一般について考えるかぎり、この
ように死は存在いたしません。生きている限りは絶対に死なな
い。死んだら死んだと自覚する私はいなくなるのですから、私に
とつて死は存在しないのです。

現代社会の多くの人々は、死をそういう形で捉えているので

はありませんか。間違いなくやつてくる死であります。その死を完全に欠落させたまま生きています。

しかしながら、他人の死でなく、私自身の死という問題が眼前に出現したときには、生きている限り死なないなどといったつて始まらないでしよう。

今日ではガンが大きな問題ですが、もしも私がガンになつてその宣告を受けたときに、「生きている限り死なない。死んだら私はいない。」というような単純な話で自分の死を片付けることは出来ないでしよう。

私にとって死が問題になるのは、たんなる死そのものではなくて、私自身のかけがえのない生が無化し、生きていることそのこと自体がなくなるという意味においてこそ、死が問題になつてきます。生きるということを深く考えると、死をどう解決するかという問題が必ず関係してきます。

死がどういう意味をもつのかは、生きるということの意味が本当に分かつたときに分かるのです。

死とは、生きるということの中に、その裏側にピタリとくつついているのです。生きたその後に死がやつてくるのではありません。いつ死ぬかわからない生命を今日も生きているということです。生の裏側にはいつも死がくつづいています。

私がいま生きているということは、死を生きていることなのです。明日も生きるということは、明日は死ぬかもしないといふことです。そういう意味で、人生において死も大きな課題で

すが、多くの現代人は、死を遙かかなたに追いやつて、まことの意味での自分の死を切実に感じることがなくなつていてのではないでしようか。

私たちは生きているかぎり、やがては死んでいくことは必然です。しかしながら、肉体は滅び死んでいくが、心の生命は死なないという世界があるのでしようか。

肉体は老いるとも心は老いない。肉体は死すとも心は死なない。こういう死に対する考え方、心の構え方というものがあると思うことです。

肉体的な老いや死は、自然の道理に従わなければならないにしても、心の世界においては、まことの生命を老いることなく、そしてまた滅びることなくして生きていく世界があるので。お釈迦様が教えてくださったものは、まさしくこのことであります。

お盆の由来を書きながら、自分の生命のきたところ・いくところを想い。自分らしく生きるとは?? 少しづつ少しづつ進めば良いのかなと今日も時間を過ごしています。

皆さんにも、豊かな人生とは何か。自分は何のために生まれたのか。お考えになるヒントになれば幸いです。

8月

7月

8/27
(日)

午前十時

8/20
(日)

午前十時

8/13
(日)

午前十時

7/23
(日)

午後一時

7/16
(日)

午前十時

7/9
(日)

正午

午前十時

定例法座・祥月命日合同法要
【加藤純幸師】

なかよしクラブ（乳幼児から小学生まで）

お盆法座
【高田慈昭師】定例法座・祥月命日合同法要
【高田慈昭師】

なかよしクラブ（乳幼児から小学生まで）

お盆法座
【上野隆平師】
医療相談
【佐藤公彦医師】

【ご法座等のご案内】

編
集
後
記

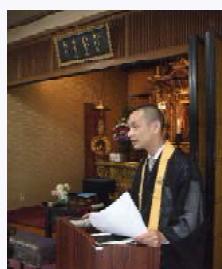
故岡本泰雄師の法話テープの筆耕を行っています。近々「しんらん同人」に掲載の予定です。

七月・八月法座のご講師は、お盆法要時に上野隆平師（京都府）。加藤純幸師（三重県）です。（写真①、②）

東京教区仏教婦人会総会が築地本願寺であります。誓願寺からは十一名が参加しました。（写真③）

坊守がフルートの練習を始めました。学生時代に戻って楽しそうです。いつまでもしなやかな心を持っていてほしいものです。

福岡在住の孫が小学一年生になり最初の夏休みがやっときま
す。上京するのが楽しみです。一方で、リキがだいぶ弱つて
きております。時の流れを思い知らされます。



①[上野隆平師]



②[加藤純幸師]



③[築地本願寺にて]